



Discussion Paper Series

No.164

戦前フィリピンのセンサスについて
——『1903年センサス』とアメリカ統治——

永野善子

May 2006

**Hitotsubashi University Research Unit
for Statistical Analysis in Social Sciences**
A 21st-Century COE Program

Institute of Economic Research
Hitotsubashi University
Kunitachi, Tokyo, 186-8603 Japan
<http://hi-stat.ier.hit-u.ac.jp/>

戦前フィリピンのセンサスについて
——『1903年センサス』とアメリカ統治——

永野善子
(神奈川大学人間科学部教授)

2006年5月

要約：本稿は、19世紀末スペイン植民地期から20世紀前半アメリカ植民地期にいたるフィリピン・センサス略史を踏まえて、1903年に実施されたセンサスがフィリピンにおけるアメリカ統治の確立に対して果たした政治的意味について考察する。第1に、スペイン植民地期におけるセンサスの歴史を概観し、第2に、アメリカ植民地統治開始直後の1903年にセンサスが実施された政治的背景を明らかにする。第3に、1903年におけるセンサスの実施体制の特徴を概観したうえ、第4には、1905年に全4巻として公開された『1903年センサス』(*Census of the Philippines: 1903*) (4)の人口分類方法について吟味し、アメリカの植民地統治における「フィリピン国民の創出様式」を浮き彫りにするものである。

はじめに

本稿は、一橋大学経済研究所「21世紀COEプログラム」『社会科学の統計分析拠点構築』において筆者が担当する研究課題「フィリピン長期経済統計構築」に関連したディスカッション・ペーパー第1号である。上記の研究課題のもとで、本格的な統計の編集作業と執筆にとりかかるために、筆者は、予備的作業として、「フィリピン経済史研究と国民所得計算——研究史についての覚書」と題するもう一本のディスカッション・ペーパーの執筆を予定している。この二本のディスカッション・ペーパーは、フィリピンの歴史経済統計を扱ううえで、あらかじめ一定の見通しを立てておく二つの問題を、直接的にあるいは間接的に扱うものである。この二つの問題とは、第1に、フィリピンでは「国民経済」(national economy、近代国家もしくは国民国家を単位とする経済的まとまり)と呼べるようなひとつの経済単位がいつ頃成立したのかという問題であり、第2には、フィリピン経済史研究において国民所得計算に関わる研究がどのように位置づけられてきたのかという、研究史の整理である。

筆者が担当する研究課題「フィリピン長期経済統計構築」は、20世紀100年間のフィリピン経済統計を収集・整理し国民所得計算を行なうものである。こうした膨大な作業を共同研究として実施するにあたって、筆者は、本研究組織の「マクロ分析研究グループの歴史統計・人口統計分析」における台湾班の長期経済統計構築を最良のモデルとして、2003年からアシスタントによるフィリピン統計入力作業を進めてきた。しかし、その過程で、フィリピン経済統計の技術的な整理にとりかかるまえに解決しなければならないひとつの課題があることに気づいた。それは、フィリピンの国民所得計算を歴史的に遡って行なうとするならば、フィリピンでは「国民経済」というひとつの経済的構成単位がいつ頃成立したのかについて、筆者なりの見解をもつことである。

フィリピン諸島という地理的空間において「国民経済」が成立したのはいつ頃のことだったのだろうか。それは、近代国家（「植民地国家 colonial state」をも含めて）という政治的構成単位の成立と軌を一にするものだったのだろうか。管見の限り、こうした大問題に正面から取り組んで解答を得た研究は見当たらない。だが、この問題に対して、全面的な解答ではないにしても一定の見通しをもたずして、「国民所得計算」の技術的作業を開始するのは不可能であろう。ちなみに、筆者はすでに別稿において、フィリピンでは植民地支配下に近代国家の骨格が形づくられ、それがようやく安定したのは、第一次世界大戦後であったとの見通しをたてた⁽¹⁾。他方、「国民経済」の成立については筆者はまだまとまった論考を執筆していないので、その作業を行なうことを2本目のディスカッション・ペーパーの課題のひとつとしている。このような研究状況において、さしあたり、ここでは、フィリピン研究の枠組みにおいてフィリピン政治経済の歴史的構造変化過程の時期区分を

仮に提示しておく、以下のようになる。

① 1870年～1920年：モノカルチャ経済の形成と成立期。1914年のパナマ運河開通により、アジア・太平洋圏とアメリカ経済圏が接近し、従来イギリス経済圏の一環として旋回してきた東南アジア経済とアメリカ経済圏とのつながりが強化された時期。別言すれば、この時期は、「国民経済」の形成をもたらすにいたったフィリピン諸島における経済上の構造変化が起きた時期である。それは同時に、植民地国家としてフィリピンにおいて「国民国家」が生成される時期でもあった。そしてこの時期とその後の時期の分水嶺は、第一次世界大戦を画期とするものであったと考えられる。

② 1920年～1965年：アメリカ統治のもとに、ひとつの近代国家たる植民地国家体制が確立し、宗主国アメリカに依存した輸出経済が展開した。そして1946年の独立後においても対米依存型の輸出経済体制が維持され、植民地期と同様に砂糖やココナッツなどの一次産品輸出が主要な外貨獲得源であった。独立後の政治体制としてもアメリカ型大統領制のもとで二大政党政治の形態が維持された。フィリピンは独立戦争を戦わずしてアメリカから独立した国として、これまで東南アジア諸国のなかでもやや特異な存在とみなされてきたが、それはこうした独立の経緯と、独立後もなごらく旧宗主国アメリカとの特惠的政治経済的關係が続いたことによるものである（このような政治経済的關係が持続した背景には、第二次世界大戦後アメリカがフィリピンを極東の重要な軍事基地のひとつとして位置づけるようになったことが挙げられる）。

③ 1965年～現在：独立後はじめて寡頭的支配層の出身ではないマルコスが大統領に就任し、1970年代から外資導入型の工業化政策がとられた。この時期は、また、フィリピンとアメリカとの特惠的経済關係が一応の終焉を迎えた時期でもあった。しかし1980年代の政情不安などにより、近隣ASEAN諸国の多く（とりわけタイ、マレーシア）が工業化に成功したのに対して、フィリピンはその波に乗れず、経済成長の面において大きな遅れをとることになった。また、ペソの対米ドルの為替相場も下落の一途をたどった。こうしたなかでマルコス政権にはじまる歴代政府によって推奨されてきた政策が海外出稼ぎ労働である。海外就労者による送金額は、2005年現在100億ドルを超え、国内総生産（GDP）の1割相当に達するという⁽²⁾。したがって、この時期は、工業化の失敗が誘引となって海外出稼ぎ労働が促進され、フィリピンが世界でも有数の「出稼ぎ立国」となっていく過程であった。

以上のように、上記の三つの時期区分にしたがうと、20世紀初頭は、ひとまず、フィリピンにとって国民国家の創生期であったと同時に、国民経済の生成期であったとすることができよう。本稿では、以上の仮説を前提として、20世紀初頭におけるアメリカ統治の意味を探るため、1903年のセンサスを題材として取り上げることにはしたい。その理由は、筆者がかつて1903年のセンサスについて短い論考を公刊しており⁽³⁾、本稿において、今日の筆者の問題意識に照らして、旧稿を位置づけ直す作業が必要であると考えたことにある。その際の筆者の主要な関心事は、フィリピンの近代国家創生期＝国民経済の生

成期において、センサスはフィリピンにおけるアメリカ統治の確立に向けてどのような政治的意味をもっていたのかにある。本稿では、以上の問題意識のもとに、19世紀末スペイン植民地期から20世紀前半アメリカ植民地期にいたるフィリピン・センサス略史を踏まえて、1903年に実施されたセンサスがフィリピンにおけるアメリカ統治の確立に対して果たした政治的意味について考察するものである。第1に、スペイン植民地期におけるセンサスの歴史を概観し、第2に、アメリカ植民地統治開始直後の1903年にセンサスが実施された政治的背景を明らかにする。第3に、1903年のセンサスの実施体制の特徴を概観したうえで、第4に、1905年に全4巻として公刊された『1903年センサス』(*Census of the Philippines: 1903*) (4)の人口分類方法について吟味し、アメリカの植民地統治における「フィリピン国民の創出様式」を浮き彫りにしていきたい。

1. スペイン植民地期センサス略史

19世紀後半、とりわけ1870年代以降、フィリピンではマニラ麻、タバコ、砂糖などを主たる輸出商品とするモノカルチャ経済が形成されていった。その過程は、同時にフィリピンにおけるナショナリズムが高まりをみせた時期であり、それは19世紀末に東南アジアで初めての対スペイン独立革命（「フィリピン革命」）への流れへと連なっていた。それはひとつの近代国家の形成に向けての運動であったが、独立革命の半ばにしてアメリカの介入によってそれは挫折する。こうして20世紀初頭以降、フィリピンではアメリカによる統治のもとで近代国家（植民地国家）形成の事業が開始されたのである(5)。したがって、1870年代から第一次世界大戦にいたる時期は、フィリピン史のうえでは、スペイン植民地期末期とアメリカ植民地期前半という二つの宗主国に支配された時代として分断されて扱われることが多いが、フィリピンにおける近代国家と国民経済の形成という観点からは、ひとつの継続した時期として理解すべきものであろう。

こうした観点から、フィリピンにおけるセンサスの歴史的変化過程について議論しようとする、第1に、近代的センサスの制度がいつ頃導入されたのか、そして第2には、それが国家権力による全面的人口把握として完成された形態をとり始めたのはいつ頃なのかを確定することから始めなければならない。幸い、第1の問題についてかなり明確な解答を与えている研究書に、ダニエル・F・ダッパーズ(Daniel F. Doeppers)、ピーター・ゼノス(Peter Xenos) 編『人口と歴史(*Population and History*)』(6)がある。とくに同書のマイケル・クリネイン (Michael Cullinane) が執筆した第10章では、フィリピン人口史料に関する詳細な紹介が行なわれている。

それによると、フィリピンでは、植民地政庁による組織的な人口調査が最初に実施されたのは1852年のことであった。このフィリピン初のセンサスは、植民地政庁の行政改革の一環として実施されたもので、行政町 (pueblo) を単位とする貢税 (tributo) 納入数

を基礎として、フィリピン諸島の人口数を毎年算出するというものであった。このような貢税を単位として人口数を割り出すという作業はすでに1799年の布告によって試みられていたが、これはあくまで貢税徴収のための作業であって、人口統計それ自体を作成するための調査ではなかった。この意味で、1852年は、フィリピンで植民地政庁がその権力によって統治領域における人口把握の第一歩を踏み出した年とみることができる。しかし、このセンサスは、今日われわれが国勢調査として一般的に理解するような、戸別調査 (house-to-house survey) にもとづく人口調査ではなかった。フィリピンで戸別調査にもとづく本格的な近代的センサスが実施されたのは、アメリカ植民地期に入ってはじめて実施された1903年のセンサスであった(7)。

さて、ここで1903年のセンサスの紹介に移るまえに、スペイン植民地期のセンサスについていくつかの事柄について言及しておきたい。

第1に、上述のように、1852年は、フィリピンではじめて植民地政庁が統治領域における人口把握の第一歩を踏み出した年であった。しかし、これは今日の研究によって位置づけられたものであり、当の植民地政庁は上記の1852年の人口調査を「センサス」とは見なしていなかったのである。

とすると、第2の問題として、フィリピンの植民地政庁自体が実施したと認識しているセンサスはあったのかどうかを確認しなければならなくなる。結論からいえば、スペイン政庁が実施したと認識した「センサス」、スペイン語では"censo"があり、それは1877年、1887年そして1896年のセンサスであった。それでは、ここで「スペイン政庁が実施したと認識している」との判断するために設けた基準はなにかといえば、人口調査が「センサス」という名目で実施され、調査報告が「センサス」として刊行されたか否かである。1877年、1887年、1896年のいずれのセンサスも、スペイン本国とその植民地・属領の住民を対象とする"censo de poblacion" (もしくは"empadramiento general")、すなわち、「人口センサス」、もしくは「全国住民登録」、の実施に関する王室令のもとで実施された。まさに近代的センサス、すなわち国勢調査制度の誕生である。これらいずれの年のセンサスも、それぞれの年の12月31日真夜中を基準時間とする全国住民調査であった(8)。

それでは、この3カ年の人口センサスは、戸別調査にもとづく人口調査だったのだろうか。この点に関して、先述のクリネイン論文はきわめて興味深い見解を示している。クリネインによれば、20世紀初頭にフィリピン統治に参加したアメリカ人行政官たちは、1887年と1896年の人口センサスでは全国悉皆調査が実施されたとの判断を下していたが、この2カ年を含む上記3カ年のセンサスでは全国規模の悉皆調査は実施されていなかった。クリネインのこのような見解は、1877年、1887年、1896年の人口センサスの統計処理過程を詳細に吟味した結果得られたものである。彼によれば、上記3カ年の人口センサスは、地方行政組織や教会が保持する既存のデータを集計した調査である、という(9)。

このように19世紀末にスペインの植民地政庁によって実施された人口センサスは、「近代国家のセンサス概念」に照らしてみた場合、きわめて不完全な近代的センサス（国勢調査）であった。しかし、ここで確認したいことは、19世紀末の3回のセンサスが戸別調査にもとづく人口調査ではなかったからといって、これが近代的センサスではないということとはできない、ということである。初期の近代的センサスは、どこの国の場合もさまざまな不完全性を伴うものであった。とすれば、19世紀末にすでにフィリピンで近代的センサス制度が導入されていたことになる。そして、そのことは、この時期にフィリピン社会の変容に対応して、スペイン植民地政庁の人口把握形態に大きな変化が生じつつあったことを示唆するものといえよう。

2. 1903年センサス実施の政治的背景

さて、ここで1903年のセンサスについての考察に入ることにしたい。

広く知られるように、アメリカがスペインに代わってフィリピン諸島の領有権を獲得したのは、米西戦争を経て1898年12月に締結されたパリ講和条約によるものであった。この時期は、前述のようにフィリピン革命の真っ只中であつた。したがってアメリカははじめにフィリピン全土に広がった革命の嵐を鎮圧しなければならなかつた。アメリカはいったん誕生したフィリピン共和国（マロロス共和国）を陥落させ、フィリピン全土を軍政下に置き、各地で全面的軍事作戦を展開した。1899年2月のフィリピン・アメリカ戦争の開始である。こうしてアメリカ軍の手に落ちた地域ごとに州知事や町長などの地方首長選挙を実施し、統治体制を確立していった。アメリカがフィリピンの平定作戦完了を宣言したのは、1902年7月4日になってからのことであつたが、その後も山地部で叛乱が続き、ミンダナオ、スールー諸島は長らく軍政下に置かれたままであつた。

アメリカ統治下初のセンサスは、このように国内の治安が依然として不安定な状況のなかで実施されたのである。それではなぜ1903年にアメリカ統治下初のセンサスが実施されたのであろうか。この点について、すでにいくつかの研究で議論されているが、1905年に4巻本として出版された『1903年センサス』の第1巻の序論が、なによりも明確にその理由を今日に伝えている。それは、次の文章から始まっている。

「4巻からなる、1903年フィリピン・センサス報告は、[フィリピン]諸島の人口と資源に関する、はじめての完璧な報告書であり、高い水準を維持するアメリカのセンサス実施方法にもとづいて作成されたものである」(10)、と。

この序論は38頁にもわたっているが、その内容は大別して、センサス実施の背景とセンサスの実施方法の二つからなっている。そこで、まず、センサス実施の背景についての記述を整理すると、要点はつぎの三つである。

第1に、センサスの実施がアメリカによるフィリピンの平定作戦の完了のあかしであつ

たことである。このことは、1902年7月1日にアメリカ議会で制定された、フィリピン諸島におけるセンサスの実施に関する法律に謳われている。それによると、「フィリピン諸島において現在続いている叛乱が終息し、全面的な平和状態が確立され、その事実をフィリピン委員会 (Philippine Commission) が認証したとき、アメリカ大統領はその事実を確認のうえ、フィリピン委員会に対しフィリピン諸島でセンサスを実施するよう命じることができる」(11)、とされている。ここにセンサスの実施主体として登場した、フィリピン委員会とは、第2次フィリピン委員会のことで、1907年まで行政および立法権を掌握することになるフィリピンにおける最高決議機関となった。委員長となった第1代の民政長官のウィリアム・H・タフト(William H. Taft)の名をとって、タフト委員会とも呼ばれたものである。

第2に、センサスの実施が、フィリピン人の議員からなるフィリピン議会(Philippine Assembly)の発足の条件であったことが挙げられる。このフィリピン議会は、上述のフィリピン委員会とともに1907年からフィリピンの二院制議会を構成することになったもので、以来1916年までフィリピン委員会が上院、フィリピン議会が下院の役割を果たした。このフィリピン議会の発足させるためには、同議員選出のための総選挙が必要であった。このため、上述の1902年7月1日の法律では、センサスの完了とその出版の2年後に、モロもしくはその他の非キリスト教徒種族の居住地域を除く地域で治安が維持されていた場合に、アメリカ大統領はフィリピン委員会に対しフィリピン議会議員選出のための総選挙を実施するよう命じることができる、とされていたのである(12)。

ところで1903年センサス実施の背景として、忘れてはならない点がある。従来の研究では、上記の2点がセンサス実施の政治的背景として頻繁に取り上げられてきたように思われるが、筆者はつぎの点が、1903年センサスの性格を理解するうえで、より重みをもつのではないかと考えている。それは、第一代民政長官タフトが1902年12月24日に発したセンサス実施布告のなかに示されている。

この布告は、センサス実施日を1903年3月2日に決定したことを明らかにしたものであるが、センサス実施の前提として、1900年4月にマッキンレー大統領がフィリピン委員会に対して送ったフィリピン統治に関する大統領指示書に触れている。この指示書は、アメリカの領有のもとでフィリピンに可能な限り自治を与えることを約束したもので、1898年12月の「恩恵的同化宣言」(Benevolent Assimilation Proclamation)にもとづいて作成されたものである。タフト長官は上述のセンサス実施布告のなかでつぎのように述べている。

「1900年4月7日に発布されたマッキンレー大統領の政策にしたがい、フィリピン委員会はフィリピン諸島の人々に対して、町議会については完全な自治を、そして州議会については部分的な自治を供与してきた。実際に経験を積むことによって、フィリピン諸島の有権者としての資格をもつ人々は自治の技術を学びつつある。……センサスの実施はフィリピン自身の議会開催にむけた総選挙を行なうために必要不可欠である。……フィリ

ピン委員会によって制定されたセンサス法の条項によって、センサスはフィリピン人の手元に置かれ、フィリピン人の管理下に置かれることになろう。センサスの実施は、したがって、フィリピン人が政府の最も重要な機能を担う能力を試すことになろう。……」(13)、と。

こうして、1903年センサスは、植民地の自治を軸としたアメリカのフィリピン統治政策の要として位置づけられていた。そのことは、同時に、アメリカ流のセンサスによってフィリピン諸島の住民を掌握し、スペインとは異なる形態で植民地支配を貫徹させることをねらったことを意味している。アメリカの対フィリピン統治政策はたしかに当初から自治をある程度保証するものであったが、それはフィリピン人がアメリカ流のセンサスの実施主体となり、フィリピン人がアメリカ流の人口分類方法でみずからを分類することを前提とするものであったといえよう。

3. 1903年センサスの実施体制

それではアメリカ大統領はどのようなセンサスの実施を命じたのであろうか。再び上述の1902年7月1日にアメリカ議会で制定された法律によると、それはつぎのようなものであった。すなわち、「センサスは人口に関わる調査を実施し、すべての住民の氏名、年齢、性別、人種 (race) もしくは種族(tribe)、現地生まれか外国生まれか、スペイン語、現地の地方語(dialect) もしくは言語、あるいは英語の読み書き能力、就学状況、住居所有状況、および工業・社会関係統計、島・州(province)、町(municipality)、もしくはその他行政区画ごとのその他の情報について、可能なかぎり包括的な報告書を作成する」(14)、と。

そして1902年9月25日に、アメリカ大統領セオドア・ローズベルトはフィリピン委員会にセンサスの実施を命じ、さらに9月30日には合衆国国勢調査局 (United States Census Bureau) に対してセンサスの集計整理を行ない、最終報告書の印刷と配布を行なうよう指示したのである(15)。

こうしてフィリピンではじめての戸別調査にもとづく人口センサス、すなわち国勢調査が実施されることになった。国勢調査実施にあたり、フィリピン全土が、平定完了地区人口(civilized population)と未平定地区人口(wild population)に大分類され、人口センサス査地区を編成するための地図の作成が試みられた。また、この大がかりな調査の準備と実施にかかわる、有能かつスペイン語に熟達したフィリピン人担当官の確保が必要であった。アメリカは本国以外では、すでにキューバやプエルトリコで国勢調査を実施した経験があり、フィリピンでもその経験をいかして国勢調査の実施に臨んでいたが、キューバやプエルトリコと決定的に異なった点は、平定完了地区では州知事や町長、町議会評議員などの地方行政官が、また未平定地区ではアメリカ軍人やフィリピン・スカウト[国家警察軍

(P C) の前身]が、国勢調査担当官に任命されたことである(16)。

『1903年センサス』第1巻の序論を書いた、同センサス長官 J. P. サンジャー (J.P.Sanger) 少将は、つぎのように述べている。

「つまるところ、アメリカ式センサスの実施は、平定され地方首長が選出された諸州の州知事や町長、町議会評議員、そして可能なかぎり、すべての知識人層 (*gente ilustrada*) すなわちプリンシパリア層の動員なくしては不可能であった。センサス実施にあたり、以前と同様今日においても大衆に対してきわめて大きな影響力をもつ、これらの階層の人々の協力を背後から得ることがきわめて重要であった。このため、以下のことが定められた。すなわち、平定され地方首長が選出された州それぞれが国勢調査監督官地区 (*supervisors' districts*) となり、州知事はその監督官に任命される。行政町の町長や少数民族地区の首長 (*chiefs of rancherías*) は特別担当官に任命され、それぞれが担当する町や地区の国勢調査の遂行に対して責任をもつ。そしてできるだけ多くの町議会評議員やプリンシパリアの人々が国勢調査員 (*enumerators*) に任命される。モロとその他ミンダナオ島の非平定住民の国勢調査については、同地区に駐留するアメリカ軍人がフィリピン人以上の影響力をもつと考えられたため、彼らが監督官としての役割を務めた。そしてできるだけ多くの信頼しうる首長 (ダト) が特別担当官に任命されることになった」(17)、と。

1903年センサス長官サンジャーによれば、当時のフィリピン諸島の平完了地区人口は約700万人であった。これらの住民が居住する地域についてできるだけ詳しい地図が地方首長たちによって集められ、それぞれの州の町、市街区 (*townships*)、村 (*barrios*)、村落 (*sitios*)、少数民族地区 (*rancherías*) の位置と面積の確認作業が地図の不備から困難を伴いながらも実施された。この結果、人口2000人を超える行政町は分割され、また1000人未満の町は隣接町と合併された。国勢調査実施のための実施地区単位が、都市部では人口1500人未満、農村部では1000人未満と定められたため、それに合わせて行政町の再編が実施されたのである(18)。

これらの地域で戸別調査を実施するには、およそ6000人の国勢調査員が必要と考えられた。これは、1調査地区あたり1人の調査員と10調査地区に対し1人の予備調査員が必要との判断から算出された数値で、これに加えて1100人から1200人の特別担当官と一定数の特別調査員が必要であった。サンジャーは、人口700万人のうちスペイン語人口は70万人と推計し、さらにマニラ大司教庁の推計に従い、十分な教育を得た人々はせいぜい7000人程度であったとしている(19)。このことは、国勢調査実施にあたり、フィリピン委員会が人員の確保に相当苦慮したことを示す事実といえよう。

さて、前述のように、国勢調査員による戸別調査は1903年3月2日に開始された。しかし、全国規模の人口に関わる戸別調査は、1903年センサスの第1段階にすぎなかった。実際、1903年センサスは、スケジュール1からスケジュール6によって構成された。スケジュール2は、農業関係統計調査であった。農業関係についても住民の農地保有状況についての戸別調査が実施された。スケジュール3は教育と学校関係、スケジュー

ル4は住民の死亡数・死亡率について、スケジュール5は社会関係統計で、道路・鉄道などのインフラ、保険・銀行業、賃金などが扱われ、スケジュール6は製造業関係の統計の収集が目的とされた。こうして収集されたデータが集計されて、1905年に合衆国国勢調査局から『1903年センサス』(全4巻)として刊行された(20)。

『1903年センサス』は、当時のフィリピンの社会経済状況を伝える貴重な史料であることはいうまでもない。さらに、それは、アメリカが領有当時のフィリピンをどのような枠組みでとらえようとしていたのか、そしてフィリピンに対してどのような統治方式を持ち込もうとしていたのかを、われわれに伝えている。以下では、『1903年センサス』における人口分類方法に焦点をあてながら、アメリカのフィリピン統治方式について議論することにしたい。

4. 『1903年センサス』の人口分類方法

公刊された『1903年センサス』(全4巻)のうち、第2巻が「人口」(Population)である。すなわち、同第2巻は、人口センサスそのものであり、国勢調査の集計結果が1000頁余りのなかに収録されている。

ところで、1903年の人口センサスの人口分類方法についてフィリピン人研究者によって近年発表された研究が二つある。ひとつは、ベニト・ベルガラ・ジュニアの著書(21)であり、もうひとつは、ビセンテ・L・ラファエル論文(22)である。この二つの研究は、いずれも1903年の人口センサスの人口分類方法に見られる人種的偏向を批判的にとらえたものである。

前者のベルガラの研究では、まず1903年人口センサスが、フィリピン諸島の住民を、"civilized population"と"wild population"に分類したことに注目する。前述のように、"civilized population"とは平定完了地区人口のことであり、他方、"wild population"とは未平定地区人口を意味する。1903年センサスによると、"civilized population"は69万8千7686人であり、他方、"wild population"は64万7千740人であった。ベルガラは、1903年センサスで平定完了地区と未平定地区の人口を区分するためにあえて"civilization"と"wildness"という用語をもちだし、しかも前者は"Christian or civilized tribes"の意味を、後者は"non-Christian or wild tribes"を意味する用語として使用されていることに、アメリカの植民地統治の体質をみようとしている。つまり、アメリカにとって自国の配下となった住民を"civilized"と呼び、依然として反旗をひるがえしている人々を"wild"と呼び、後者をさげすみながら、フィリピン諸島住民の人種的序列を行なっている事実を批判的に考察している(23)。

これに対して、ラファエル論文では、平定完了地区の人口が、肌の色、すなわち、"color"によって分類されている事実にとりわけ注目する。ラファエルによれば、1903年セン

サスの人口分類としてもっとも本質的な方法は、"color"、すなわち肌の色によって、すべての人口を分類するというものであったと述べている。ラファエルは、平定完了地区と未平定地区の人口分類は本質的なものではないとみている。なぜなら、この分類は、各地における平定作戦が事実上終了すれば、いずれ必要となくなるものであったからである(24)。

事実、1918年センサスでは、すべての人口を"civilized population"と"wild population"に大別し、それぞれ別々の統計として集計するという方法はとられていない。ところが、肌の色、すなわち、"brown," "mixed," "yellow," "white," "black"によって人口を分類する方法は、その後、"color"という用語が"race"に代わったとはいえ、1918年そして1938年の人口センサスでも繰り返し行なわれた(25)。さらに、先述のベルガラ指摘によれば、1946年にフィリピンが独立したあと、フィリピン共和国自身が実施した1948年センサスにおいても、この"race"という分類方法のもとで、人口が"brown," "yellow," "white," "American," "Negro," "Negrito," そして"mixed"に分類されている(26)。このように、1903年センサスで導入された、"color"にもとづいて人口を分類する方法は、その後、"race"という枠組みでほぼそのまま継承され、独立直後にいたるまで消えることはなかったのである。

それでは、1903年センサスには、上記の二つの分類方法以外に、どのような人口分類方法があったのであろうか。国勢調査ではどのような調査項目が準備されていたのだろうか。1903年の人口センサスの質問項目は、本稿末尾に資料1として掲げた質問整理票から明らかになる。これは、平定完了地区の住民を対象として準備された世帯別質問表を地域別に整理した票である。調査項目として、真ん中あたりに"personal description"という項目があり、その中の一番左に"color"という調査項目がある。さらに、興味深いことに、"personal description"という項目の右側に"nationality"という項目と"citizenship"という項目が並んでいる。前者の"nationality"は、「生まれた国」、後者の"citizenship"は、"Filipino," "American," "Spaniard," "Chinese," "Japanese, etc."とされている。このことは、平定完了地区では戸別調査によって、「国籍」が調査されていたことを意味している。

ところが、『1903年センサス』第2巻の目次に掲げられた図表一覧をみると、"Civilized population, classified by color and sex..." あるいは"Foreign born population, classified by color and sex..."という表のタイトルはあるものの(27)、"Civilized population, classified by nationality and sex..."あるいは"Foreign born population, classified by citizenship and sex..."という表のタイトルを発見することができない。

それでは、なぜ1903年の国勢調査で"citizenship"が調査されたのだろうか。そこで"citizenship"という用語を求めて、『1903年センサス』第2巻の目次の図表一覧に掲げられた表のタイトルを追っていくと、49番目から52番目の表のタイトルに"citizenship"という用語があることがわかる。これらの表のタイトルは、"Civilized male population of voting age, classified by color, tribe, citizenship, and literacy, for the

Philippine Islands, " " by provinces and comandancias....," ".... by principal islands....," "..... by municipalities"というものである(28)。

すでに、本稿第2節で、1903年センサス実施の政治的背景として述べたように、センサスの実施が、フィリピン人の議員からなるフィリピン議会の発足の条件であり、フィリピン議会を発足させるためには、同議員選出のための総選挙が必要であった。ところで総選挙の有権者は、23歳以上の男子で、しかもアメリカ占領以前に町議会の役職を務めた経験がある資産家で、英語もしくはスペイン語を読み書き話す能力をもつ者に限定されていた(29)。もちろんフィリピン国籍であることがその前提である。したがって、"citizenship"の項目は、制限選挙を実施するために、全人口のわずか1.5%相当の有権者人口を割り出すための作業に必要不可欠の項目であったと考えることができる。

結び——アメリカ植民地統治下のフィリピン国民の創出様式——

以上、本稿で考察したように、『1903年センサス』第2巻では、本質的な人口分類基準は"citizenship"ではなく"color"であり、それは前述のように、のちのセンサスに"race"という名称で継承されていった。ただし、1918年、1939年センサスの人口分類方法を注意深く点検すると、1903年センサスとは異なり、"race"と"citizenship"の二つの分類方法においてすべての人口が分類されるようになっていることに気がつく。このことは、1918年センサスから、フィリピン人諸島住民が"race"と"citizenship"の二つの分類基準で把握されるようになったことを意味するものであろう。ここにおいて、フィリピン人は、一方で「フィリピン国民」として植民地国家によって掌握されながら、他方において、「人種」によって序列化されるという状況に置かれたことになる。そして、これが、アメリカ植民地統治によるフィリピン国民の新たな創出様式であったといえよう。

なぜアメリカはこのような国民の創出様式をフィリピンにおいて選択したのであろうか。この問題に対する回答は、ビセンテ・ラファエルが強調した、アメリカ植民地統治下の3回のセンサスに見られる"color"や"race"といった分類方法だけでなく、ベニト・ベルガラが注目した、1903年センサス固有の"civilized population"と"wild population"の人口分類にも関わることであり、さらに、本稿で、筆者が1903年センサス実施の政治的背景として第3番目に指摘したアメリカのフィリピン統治政策の基本理念とも多いに関連したものである。

まず、はじめに指摘すべきことは、合衆国政府国勢調査局にとって、人口を「肌の色」で分類することは、しごく当然であったことである。というのは、そもそもアメリカ本国の人口センサスでは、"white"と"non-white"という人口分類方式を採用してきたからである。アメリカで最初のセンサスが実施されたのは1790年で、そのひとつの目的は人口を基礎にして各州の連邦議会代表数を決めることにあった。以来、アメリカは10年ごと

にセンサスを実施したが、筆者が確認するかぎり、1950年まで人口が"native whites"と"non-whites"に大分類されてきた(30)。したがって、フィリピンの人口を「肌の色」で分けることは、アメリカ本土で長らく採用されてきた人口分類方法に則ったものであった。それはアメリカ社会が建国以来、顕在的かつ潜在的に形成してきた、WASP、すなわち、"White Anglo-Saxon Protestant"を頂点とする人種的序列を反映するものである。

それでは、なぜアメリカが、自国の領土を超えて植民地でも同様の人種的序列にもとづいた人口把握を試みたのであろうか。その理由は、米中関係の著名なアメリカ人研究者マイケル・ハント (Michael Hunt) がその著書『イデオロギーとアメリカの外交政策 *Ideology and U.S. Foreign Policy*』でいみじくも論じているように、アメリカの対外政策は、その初発から国内の人種的序列イデオロギーにもとづいて展開されていたためである(31)。さらに、ウォルター・ウィリアムズ (Walter Williams) 論文によれば、アメリカは国内のアメリカ・インディアン対策をフィリピン統治のモデルとした(32)。すでに本稿第2節で紹介した、1900年4月のマッキンレー大統領のフィリピン委員会に対する指示書のなかでも、つぎのように触れられている。「[フィリピン]諸島の未平定の種族を扱うに際して、[フィリピン]委員会は、[アメリカ連邦]議会が北米インディアン種族に対し彼らの種族的組織と統治機構を維持することを認めたと同様の過程を採用すべきである」(33)、と。ここにアメリカの「恩恵的同化」の本質があり、『1903年センサス』第2巻「人口」は、そのひとつの具現形態をみることができるといっても過言ではあるまい。

かくして、本稿では『1903年センサス』における人口分類方法を検討することにより、20世紀初頭におけるアメリカのフィリピン統治の特徴の一端を明らかにした。そして同時に『1903年センサス』にみられた人口分類方法が一定の形式的変容を伴いながらも、その後も踏襲され、アメリカ植民地期のみならず、独立後においても一定の有効性を維持していたことも概観された。本稿は、とりあえず、題材を1903年に実施されたセンサスに求めながら、アメリカの植民地統治初期の近代国家形成過程のひとつに触れたにすぎない。しかし、そのひとつのなかに、アメリカ植民地統治のあり方が凝縮されていたように思われる。この意味で、『1903年センサス』における人口分類方法の検討は、20世紀初頭のフィリピンにおける植民地国家生成過程を浮き彫りにするためのひとつの作業であり、そのことを最後に確認して、ひとまず筆をおくことにする。

(注)

- (1) 永野善子『フィリピン銀行史研究——植民地体制と金融』2003年、第1章。
- (2) 「出稼ぎ大国仕送り生かせ」『朝日新聞』2006年4月26日。
- (3) 永野善子「アメリカ植民地国家とフィリピン国民の創造——『1903年センサス』にみる」『商経論叢』(神奈川大学)第36巻第3号(2001年1月)。
- (4) United States, Bureau of the Census, *Census of the Philippine Islands Taken*

under the Direction of the Philippine Commission in the Year 1903, Washington, DC: Government Printing Office, 1905, 4 vols (以下 *Census of the Philippines: 1903* と略記) .

- (5) フィリピン革命について詳しくは、Ileto, Reynaldo C. *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 1979 (レイナルド・C. イレート著、清水 展・永野善子監修、川田牧人・宮脇聡史・高野邦夫訳『キリスト受難詩と革命——1840～1910年のフィリピン民衆運動』法政大学出版局、2005年)、および池端雪浦『フィリピン革命とカトリシズム』勁草書房、1987年を参照。
- (6) Daniel F. Doeppers and Peter Xenos eds., *Population and History: The Demographic Origins of the Modern Philippines*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 1998.
- (7) Michael Cullinane, “Accounting for Souls: Ecclesiastical Sources for the Study of Philippine Demographic History,” In *Population and History*, edited by Doeppers and Xenos, pp.316-317.
- (8) Philippine Statistical Association, “Statistics,” In *Philippine Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol. 1, Quezon City: Philippine Social Science Council, 1993, p.442.
- (9) Cullinane, “Accounting for Souls,” p.316.
- (10) *Census of the Philippines: 1903*, vol.1, p. 11.
- (11) *Ibid.*
- (12) *Ibid.*, pp. 11-12.
- (13) *Ibid.*, p. 20.
- (14) *Ibid.*, p. 11.
- (15) *Ibid.*, p. 12.
- (16) *Ibid.*, pp. 12-17.
- (17) *Ibid.*, p. 17.
- (18) *Ibid.*, pp. 14-15, 18.
- (19) *Ibid.*, p. 16.
- (20) *Ibid.*, pp. 40-47.
- (21) Benito M. Vergara, *Displaying Filipinos: Photography and Colonialism in Early 20th Century Philippines*, Quezon City: University of the Philippine Press, 1995.
- (22) Rafael, Vicente L. “White Love: Census and Melodrama in the U.S. Colonization of the Philippines,” In *White Love and Other Events in Filipino History*, by Vicente L. Rafael, Durham, NC: Duke University Press, 2000, pp.

- 19-39. (邦訳「白人の愛——アメリカのフィリピン植民地化とセンサス」、レイナルド・C・イレート、ビセンテ・L・ラファエル、フロロ・C・キブイエ著、永野善子編・監訳『フィリピン歴史研究と植民地言説』めこん、2004年、127～160頁)。
- (23) Vergara, *Displaying Filipinos*, pp.47-50.
- (24) Rafael, “White Love,” pp.19-39. (邦訳「白人の愛」、127～160頁)。
- (25) Philippine Islands, Census Office, *Census of the Philippine Islands Taken under the Direction of the Philippine Legislature in the Year 1918*, Manila: Bureau of Printing, 1921, vol.2; Philippines (Commonwealth), Commission of the Census, *Census of the Philippines, 1939*, 1941, vol. 2.
- (26) Vergara, *Displaying Filipinos*, p. 53.
- (27) *Census of the Philippines: 1903*, vol. 2, pp. 5-8.
- (28) *Ibid.*, p. 7.
- (29) Teodoro A. Agoncillo and Milagros C. Guerrero, *History of the Filipino People*, Quezon City: R. P. Garcia Publishing Co., 1973, p. 326.
- (30) Ansley J. Coale, “The Population of the United States in 1950 Classified by Age, Sex, and Color – A Revision of Census Figures,” *Journal of the American Statistical Association*, no. 50 (Mar.1955), pp. 16-54.
- (31) Michael H. Hunt, *Ideology and the U.S. Foreign Policy*, New Haven and London: Yale University Press, 1987.
- (32) Walter L. Williams, “United States Indian Policy and the Debate over Philippine Annexation: Implications for the Origins of American Imperialism,” *Journal of American History*, vol. 66, no. 4 (Mar.1980), pp. 810-831.
- (33) “Appendix VII: The President’s Instructions to the Commission,” In *The Philippine Islands* by W. Cameron Forbes, Boston and New York: Houghton Mifflin Co., 1928, vol. 2, p. 445.

[参考文献]

A. 資料

1. Aragón, Iledefonso de. *Estados de la Población de Filipinas Correspondiente a el Año de 1818*. Manila: Imprenta de D.M.M. por Anastacio Gonzaga, 1820.
2. Payo, Pedro, ed. *Censo de Población de las Islas Filipinas Perteneciente al Año 1876*, Manila: Establecimiento tipográfico de Ramírez y Giraudier, 1878.
3. United States, Bureau of Insular Affairs. *A Pronouncing Gazetteer and Geographical Dictionary of the Philippine Islands*. Washington, DC: Government Printing Office, 1902.

4. United States, Bureau of the Census. *Census of the Philippine Islands. Bulletin 1: Population of the Philippines by Islands, Provinces, Municipalities, and Barrios Taken in the Year 1903*. Washington, DC: Government Printing Office, 1904.
5. United States, Bureau of the Census. *Census of the Philippine Islands Taken under the Direction of the Philippine Commission in the Year 1903*. Washington, DC: Government Printing Office, 1905, 4 vols.
6. H. Otley Beyer. *Population of the Philippine Islands in 1916 (Población de las Islas Filipinas en 1916)*. Manila: Philippine Education Co., Inc., 1917.
7. Philippine Islands. Census Office. *Census of the Philippine Islands Taken under the Direction of the Philippine Legislature in the Year 1918*. Manila: Bureau of Printing, 1920-21, 4 vols.
8. Philippines (Commonwealth), Commission of the Census. *Census of the Philippines, 1939*. Manila: Bureau of Printing, 1940-43, 5 vols.(ただし Vol. IV の出版地は Washington, DC).

B. 研究書・論文

1. Agoncillo, Teodoro A., and Milagros C. Guerrero. *History of the Filipino People*. Quezon City: R.P. Garcia Publishing Co., 1973.
2. Clymer, Kenton J. "Humanitarian Imperialism: David Prescott Barrows and the White Man's Burden in the Philippines." *Pacific Historical Review*, Vol. XLV, No. 4 (Nov. 1976).
3. Coal, Ansley L. "The Population of the United States in 1950 Classified by Age, Sex, and Color — A Revision of Census Figures." *Journal of the American Statistical Association*. No. 50 (March, 1955).
4. Corpus, O. D. *The Roots of the Filipino Nation*. Quezon City: AKLAHI Foundation, Inc., 1989, Vol. 1.
5. Doeppers, Daniel F., and Peter Xenos, eds. *Population and History: The Demographical Origins of the Modern Philippines*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 1998.
6. Forbes, W. Cameron. *The Philippine Islands*, Boston and New York: Houghton Mifflin Co. 1928, 2 vols.
7. Hunt, Michael H. *Ideology and U.S. Foreign Policy*. New Haven and London: Yale University Press, 1987.
8. Iletto, Reynaldo C. *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 1979

- (レイナルド・C・イレート著、清水 展・永野善子監修、川田牧人・宮脇聡史・高野邦夫訳『キリスト受難詩と革命——1840～1910年のフィリピン民衆運動』法政大学出版局、2005年)。
9. Iletto, Reynaldo C. *Filipinos and Their Revolution: Event, Discourse and Historiography*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 1998.
 10. Iletto, Reynaldo C. *Knowing America's Colony A Hundred Years from the Philippine War*. Occasional Paper Series No. 13. Center for Philippine Studies, School of Hawaiian, Asian and Pacific Studies, University of Hawaii at Manoa, 1999.
 11. Kramer, Paul. *The Blood of the Government: Race, Empire, the United States, and the Philippines*. Chapel Hill, NC: North Carolina University Press, 2006.
 12. May, Glenn Anthony. "150,000 Missing Filipinos: A Demographic Crisis in Batangas, 1888-1903." In *A Past Recovered*, by Glenn May. Quezon City: New Days Publishers, 1987.
 13. Philippine Statistical Association. "Statistics." In *Philippine Encyclopedia of the Social Sciences*. Vol. 1. Quezon City: Philippine Social Science Council, 1993.
 14. Rafael, Vicente L. "White Love: Census and Melodrama in the U.S. Colonization of the Philippines," In *White Love and Other Events in Filipino History*, by Vicente L. Rafael, Durham, NC: Duke University Press, 2000 (ビセンテ・L・ラファエル「白人の愛——アメリカのフィリピン植民地化とセンサス」、レイナルド・C・イレート、ビセンテ・L・ラファエル、フロロ・C・キブイェン著、永野善子編・監訳『フィリピン歴史研究と植民地言説』めこん、2004年)。
 15. Salman, Michael. *The Embarrassment of Slavery: Controversies over Bondage and Nationalism in the American Colonial Philippines*. Berkeley: University of California Press, 2001.
 16. Vergara, Benito M., Jr. *Displaying Filipinos: Photography and Colonialism in the Early 20th Century Philippines*. Quezon City: University of the Philippine Press, 1995.
 17. Williams, Walter L. "United States Indian Policy and the Debate over Philippine Annexation: Implications for the Origins of American Imperialism," *Journal of American History*. Vol. 66, No. 4 (Mar. 1980).
 18. 池端雪浦『フィリピン革命とカトリシズム』勁草書房、1987年。
 19. 高橋 章『アメリカ帝国主義成立史の研究』名古屋大学出版会、1999年。
 20. 永野善子「アメリカ植民地国家とフィリピン国民の創造——『1903年センサス』にみる」『商経論叢』(神奈川大学)第36巻第3号(2001年1月)。
 21. 永野善子『フィリピン銀行史研究——植民地体制と金融』御茶の水書房、2003年。

22. 野沢勝美「フィリピン統計制度の歴史」『ニュースレター：アジア長期経済統計データベースプロジェクト』（一橋大学経済研究所）第13号（1999年5月）。
23. A. ラタンシ著、本橋哲也訳「人種差別主義とポストモダニズム（上）（下）」『思想』第868号（1996年10月）、第870号（1996年12月）。
24. E. サイド著、大橋洋一訳『文化と帝国主義』みすず書房、1998年。
25. 志村陽一「アメリカの帝国意識」北川勝彦・平田雅博編『帝国意識の解剖学』世界思想社、1999年。
26. 若林幹夫『地図の想像力』講談社、1995年。

[注記] 本稿は、研究発表「戦前フィリピンのセンサスについて——1903年センサスとアメリカの統治」（第67回統計制度研究会、一橋大学経済研究所、2006年3月28日）にもとづいて執筆された。清川雪彦先生はじめ研究会の参加者から頂戴したコメントに深く感謝します。

Census of the Philippine Islands taken under the direction of the United States Philippine Commission.

Province _____
 Municipal District _____
 Sheet No. _____, Page 1.

SCHEDULE No. 1.—POPULATION.

Enumerator.

Superintendent's District No. _____
 Enumeration District No. _____
 Municipality _____, barrio _____, Institution _____
 Enumerated by me on the _____ day of _____, 19____.

| LOCATION. | | RELATIONSHIP TO EACH PERSON IN THE HEAD OF THE FAMILY. | PERSONAL DESCRIPTION. | | | | CITY, TERRITORY, ISLAND, etc. | OCCUPATION. | EDUCATION. | | | | OWNERSHIP OF HOME. | | | | | | | | | |
|-----------------------|----------------------------|--------------------------------------------------------------------|---------------------------|-------------------------------------------------|------------------------------|----------------------------------|-------------------------------|-------------|----------------------------------------------------------|-----------|------------|-----------|-------------------------------------------------------|----------------------------|-----------------------------------------|---------------------------------------------|---------------------------------------------|----|----|----|----|--|
| In cities or pueblos. | In the order of the house. | | Age at the last birthday. | Whether married or single, widowed or divorced. | Inane, deaf, dumb, or blind. | Country of birth of this person. | | | Months of school attendance during the past school year. | Can read. | Can write. | Superior. | Is the house of his own or of others during the year? | What is the mouth by rent? | Which is rented, the land or the house? | Is he the owner of the house or of neither? | Is he the owner of the house or of neither? | | | | | |
| Number of the house. | Number of the lot. | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | |
| | | Name of each person who resides with this family or in this house. | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

[資料 1] 『1903年センサス』の国政調査質問整理表

出典： United States, Bureau of the Census. *Census of the Philippine Islands Taken under the Direction of the Philippine Commission in the Year 1903*. Washington, DC: Government Printing Office, 1905, Vol. 2, p. 10.